

播磨灘でウミエラ大発生！

環境増養殖担当 吉田和貴

Key words；大量発生，ウミエラ，駆除，漁業被害

ウミエラの発生

2 年前の話になりますが，2019 年 1 月，鳴門の漁業者の方から，「マンガ（鉄の桁に網が付いた底曳きの漁具）に長い海藻のようなものが大量にひっかかってくる」と連絡があり，その一部を持ってきていただきました。一見すると海藻の茎のようですが，手触りや臭いが動物的な印象でした。図鑑で調べてみたところ，ウミエラという生物の仲間のホソウミエラであることが分かりました（写真 1）。

ウミエラは刺胞動物で，サンゴやイソギンチャクの仲間です。基部を海底に埋め，直立した状態で生息しています。左右のひだ（葉状体）にはポリプという小さなイソギンチャクのような構造が多数付いており，それを使って海中のプランクトンを捕食します。

実際に網にかかっている状態のウミエラも見せて頂きました（写真 2）。大量のウミエラが端から端まで引っかかっています。何度網を引いてもかかる数がほとんど減らないとのことで，膨大な量のウミエラが海底に生息していることが予想されました。情報提供して下さった漁師の方の話では，このような生物が大量にかかる，というのはこれまで一度も無かったとのことで，2019 年以降はウミエラにとって何かしら好適な環境が形成され，大繁殖したと考えられます。



写真 1：ウミエラ

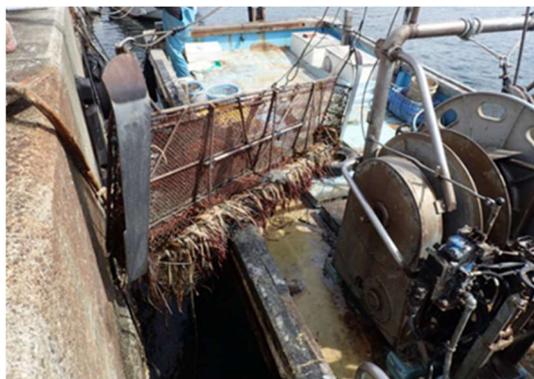


写真 2：マンガにかかったウミエラ

ウミエラがマンガの爪に詰まると、漁業に支障をきたす可能性があります。漁師の方によると、曳く度に毎回掃除をしなければいけないので手間がかかる上に、足下に落ちたウミエラを踏むと粘液で滑るので非常に厄介とのことでした。

ウミエラの飼育

せっかくなので、マンガにかかったウミエラを幾つか研究所に持ち帰りました。体長を測定したところ、約20~50cmでした。持ち帰った段階では葉状体が縮んでおり、生死の判別もできない状態だったので、水槽に入れて様子を見ることにしました。すると、数日後には縮んでいた葉状体が左右に広がり、本来の姿を見ることができました(写真3)。回復後はしきりに葉状体をひらひらさせて、捕食活動を行っているようでした。



写真3：水槽内のウミエラ

ある日様子を見てみると、ちょっとした異変に気付きました(写真4)。ウミエラの先端が水槽の壁に付いていたヒトデ(イトマキヒトデ)の口側に入っています。どうやら、ヒトデがウミエラを捕食しているようでした。捕食された部分は中の骨格だけになってしまい、結局この個体は死んでしまいました。この捕食が自然環境下でも行われるのかは分かりませんが、ヒトデとウミエラの思わぬ関係性を知ることが出来ました。

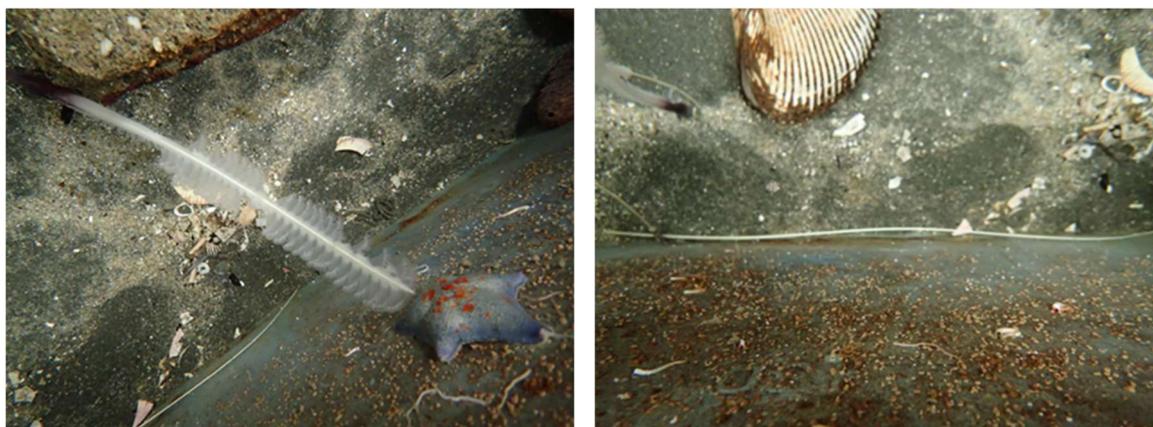


写真4：(左) イトマキヒトデに捕食されるウミエラ (右) 捕食され骨軸のみになったウミエラ

2021 年の発生状況

それから 2 年経った 2021 年の 2 月に再び漁業者の方に連絡してみたところ、「場所によってはまだたくさん獲れる」とのことでした。獲れたウミエラを持ってきてもらいサイズを測定したところ、約 40~60cm で、2019 年に見られていた 20cm 程度の個体は見られませんでした。

ついでに、ウミエラが多く獲れた海域を教えてくださいました (図 1)。2019 年は、播磨灘の沖合 (①) と北泊のワカメの養殖漁場周辺 (②) で多く、①と②の間の海域にはあまりいないそうです。2021 年は、①には相変わらず多いようですが、②の方では減少しており、骨軸 (死骸) がよくみられるとのことでした。

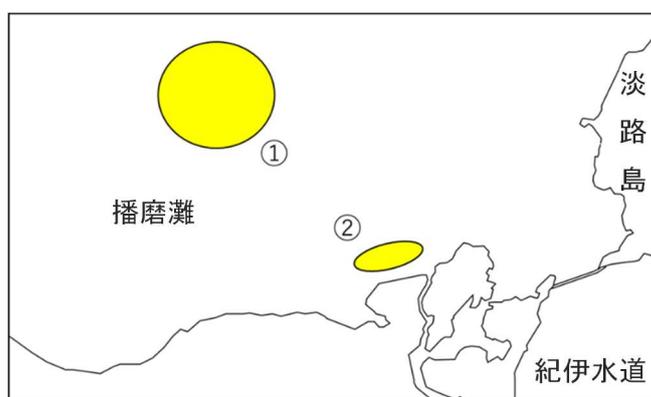


図 1 : 漁業者に教えていただいたウミエラの多い海域。2021 年 2 月現在、②の海域では減少したとのこと。

県外の事例

他の県でウミエラの大量発生について報告がないか調べてみると、2009 年に同じく瀬戸内海の愛媛県魚島でもウミエラの大量発生が報告されていました。報告書の写真を見る限り、徳島県で発生しているホソウミエラと同じ種のようなようです。漁業に支障を来すことから、精力的な駆除が行われていました。愛媛県の担当者に最近の発生状況について伺うと、昨年辺りから再び増加傾向にあるとのことでした。

今後も他の海域で同様の事例が見られるかもしれませんので、そのときの参考になるようにここに記録しておきます。

引用文献

資源回復・漁場生産力強化事業評価委員会 (特定非営利活動法人水産業・漁村活性化推進機構). 漁業者等地域活動普及啓発部会 (輪番休漁事業) 報告書 2011; 146-157.